

NO 189

# 泉南走ろう会

連絡先  
泉南スポーツ社  
072-4(83)4653

お知らせ

## 一、例会日

九月十四日

種河神社 九時集合

コースは未定

ただし、会長、西さん、徳山さん、岡田  
が八ヶ岳野辺山高原ウルトラマラソン  
に参加の為出席できませんので、よろ  
しくお願ひします。

九月二十八日

種河神社 九時集合

コース未定

## 二、泉州国際市民マラソンについて

来年二月十五日に行われる泉州  
マラソンの参加申込が九月一日から三十  
日までとなっています。毎年抽選に  
もれる方が何人かいますが、志願の様に  
申し込みましょう。

## 三、大会参加情報

去る七月二十五日に富士登山競走  
に参加しました。西さんがすばら  
しいタイムで完走されました。本当  
にびっくり、どこにある体カがある  
のが、頂上で奥さんとなられる史子  
さんが待っていたからなのか、  
タイム三時間二十七分です。

1997. 8. 10

## 富士登山レース顛末記

徳山 早苗

一度は、日本一高い富士山へ走り上がる過酷なレースに出場してみたいと思っていました。泉南走ろう会の皆様の情報で第50回大会である、今年から年令制限が緩和され、私にとっては最初で最後のチャンス到来とばかりに前後の見境もなく簡単にエントリーをしてしまいました。走ろう会のトップランナー岡田さん、西さん(すべて経験豊富な熟練ランナー)とともに...

登山など一度も経験のない私にとっては山と云えば、お菊山に登った程度なのに何とかなるさといった安易さで(今まで何とかいいつも完走出来た思い上がりもあり)富士山に挑戦したのです。

レース当日(1997. 7. 25)天候、晴、1合目より頂上までの距離(21km)、その雄大な富士は甘くはありませんでした。スタート後しばらくは極めて順調で、五合目までも思い通りレースで、まあ完走は軽いかと思いつつ険しくなる一方の8合目の関門を過ぎた頃からこれは大変だと感じ始めたわけです。

新幹線とか、写真で見ると富士山は優雅で女性的な穏やかスロープですが実際の8合目からは、ゴツゴツとした男性的岩肌で坂道の角度が急となり始め、這い上がるように必死に岩にしがみつきます。意識朦朧となりはじめ登る足に力をいれるのですが、身体が宙に浮いた様になりました。一步一步足を前に出すことだけと心に言い聞かせるのですが、足を踏み外せば命がないのだとおもうと、顔が地面擦りつくほど這うように登っていました。

ふらつく身体を支えながらがんばって登ってゆくのですが、一向に頂上は見えずただまへのランナーの背中と列が続くのみでした。8合目を「この調子だとゴール出来る」と励まし一緒に通過したランナーも途中でストップしていたが、その人を励ます余裕も残っておらず、ひたすら這うがごとく身体を前にやるのみ、空っぽの頭に突然誰かが「チクショー時間切れ!」と叫んだ。まさか まさか と思いつつも時計をみる元気すらなく、ただ涙があふれるばかりでした。

頂上で待っていてくれる会長はじめサポートしてくれる人達がいることを思うとどうしても登らねばと汗でグチャ グチャになりながらいつのまにか頂上に立つ事が出来ました。ベトベトでふらつく私を支えてくださった堀池さん、岡田さん最後までみずすず寒い中待っていてくださった会長、西さんどうも有難う御座いました。ポンヤリしていた頭の遠いところで「完走したけど完走証はもらえない」と言う西さんの声が妙に脳裡に残っています。

一人では到底完走出来なかったこの過酷な富士登山レース、時間切れではあったのですが完走出来た喜びと、5分足らなかった悔しさが入り交じっておりますが、2週間たった今、この様な経験をさせてくださった会長はじめ泉南走ろう会の皆様本当に感謝致しております。

レース後、左足の静脈瘤をとる手術をいたしました。治り次第新たな気持ちで練習及びレースに挑戦し続けたく思っております。

ありがとう ございました。





♪富士はく 日本一のヤマ♪ この童謡で歌われるようにやはり、日本一の山だった。七月の梅雨明けの二十五日に行なわれた、第50回富士登山マラソンに、走友と参加した私は霊峰富士で、苦しくも楽しい一日を過ごさせてもらった。

私自信、初めての山岳マラソンでましてや、千メートル以上の山に登ったことなどなかった。写真で見ると、冠雪の雄大で美しい富士と、実際登ってみて岩だらけの富士とのギャップはあまりに大きかった。富士吉田市役所をスタートして、永遠に続く登りは覚悟はしていたものの、いつかあのコーナーを曲がると下りを期待している自分に、軽蔑しつつも体は標高を上げていく。

五合目から、壁のように立ちふさがる富士に、昔から山岳信仰の対象で人を容易に受け入れなかった山だということが、登るにつれ身にしみてわかった。八合目からの軽い高山病に悩まされつつ、一歩ずつ足を上げ岩を乗り越えていく。ここで止めるわけにはいかないんだ。頂上では三人が私たちのため、前日からリュックに着替えを入れ、待っていてくれているんだ。絶対に止めるわけにはいかない、這ってでも登るんだ。この強い意志だけで、私は体を持ち上げていく。手を延ばせばすぐそこに見える頂上が、一向に近づくかたはがゆさ。

もう体力の限界だと感じ始めたとき、天空からの神の声のように私には聞こえた、頂上で待つ仲間の声援。私の体の中に、みるみる力が湧きでてくるのがわかる。そしてゴールへ。霊峰富士は征服するのではなくて、登らしてもらっているのだ。富士山の最高点に立ち、あらためて思う。

最後に、頂上で寒い中、何時までも待っていてくれた栗野原さん、堀池さん、松藤さんに心から感謝致します。ありがとうございます。

西 和秀

